

# 上海の街と人の40年描く

## 王安憶『長恨歌』 待望の邦訳刊行



長らく邦訳がまたれた中国文学の記念碑的作品が、とうとう刊行された。王安憶著『長恨歌』（飯塚容訳、アストラハウス）＝写真。主役は美しい一人の女性でもあり、上海という街でもある。緊密に糸と糸が絡み合うゴブラン織りのように、街と女性の人生が交差する。王安憶は1954年南京生まれの女性作家。劇作家の父、作家の母を持ち、1歳で上海に移る。文化大革命を経て、80年に本格的に作家活動を開始した。代表作の長編小説『長恨歌』が刊行されたのは96年。作品は2003年に舞台化されロングランとなり、05年には映画化、06年にはテレビドラマ

化されて、多くの人たちに愛された。版元のアストラハウスによると、その長さもあって邦訳の実現が遅れたという。

冒頭から引き込まれる。上海の横町「弄堂」を俯瞰的に見下ろし、なめるようにそのディテールを描き写す。バルコニーの鉄製の手すり、ベッドカバーの模様、電灯のかさに積もるほこりまで、読者はじらされながら細部を追ううち、生き物のような街を知ることになる。

「上海の繁華は女性の風貌をしている。この都市自体が、一人の女性だとも言える」。そうして作者が視点を定めるのは、「典型的な」上海の弄堂のお嬢さん、王琦瑤。美しいがそこらにいるような16歳の少女が、友人に誘われて映画製作所に遊びに行く。戦禍を経た1945年のその日から、物語は幕を開ける。

王琦瑤は彼女に魅了された人たちの助けを得て、「ミス上海」に選ばれる。若くして栄華を手にするが、人生には終始痛みがつきま続った。ロマンスを求め、娘が生まれ、やがてあっけなく生命が絶たれる。同時に上海を取り巻く環境もめまぐるしく変化する。国共内戦があり、60年代半ばには「安定と余裕」が生まれ、文化大革命が始まり、終結し、街に彩りが戻ってくる。80年代に新しい時代を迎えると、輝いていた弄堂にも終わりが近づく。

王安憶がつづるのは往時への追憶には違いないが、過剰な情緒とは無縁だ。人生には虚と実がつきものだという諦念にも似た視線で見つめ、映画から始まり、写真、ミコンテストの舞台、テレビといったさまざまな装置がそれを象徴する。見る人と見られる人、舞台上と舞台裏。まぶしい照明を当てれば主役は輝くが、「カット」の声と共に陰影のない現実に戻る。放

送が終了すればテレビの画面は砂嵐だ。多くの男が王琦瑤に魅了されるが、「人生は、お芝居のようなものでしょう？」と彼女は言う。上海の街と生活を描く筆致は、絵画に例えれば写実画だろう。しかし、細部を重ねて浮かぶのは抽象画だ。長い長い物語も、終わってみれば一夜の夢のようにあっけなく、手にはその重みと道理だけが残る。

凝った装丁も魅力的だ。カバー画は、画家の塩月悠さんが物語を読んだうえで、この本のために制作したという。タイトルの文字は、活版印刷から文字を起こしたものだ。中国・宋の時代に用いられた木版印刷に由来がある宋朝体を用いている。アストラハウスの和田千春さんは「この『長恨歌』の3文字で、長大な物語の存在感を表そうと思ったとき、一番しっくりきた」と話す。

【高橋咲子】